

四国におけるイネドロオイムシの分布と発生の記録

川沢哲夫・高井幹夫*・山下 泉*

(日本バイエルアグロケム株・*高知県農業技術センター)

Records of *Oulema oryzae* in Shikoku. by Tetsuo KAWASAWA, Mikio TAKAI* and Izumi YAMASHITA* (Nihon Bayer Agrochem; *Kochi Agricultural Research Center, Nankoku-shi, Kochi, 783)

はじめに

イネドロオイムシ (=イネクビボソハムシ) *Oulema oryzae* (KUWAYAMA, 1931) は、イネの初期生育を阻害する代表的な寒地性害虫で、北海道、本州、四国に分布していることになっている。しかし、四国では、これまで明確な発生記録がなく、四国での分布が注目されていた(石原, 1988)。1990年になって高知県内の二ヶ所の水田に発生したのを機会に、四国における過去の発生を記録と聞き取りによって調査し、得た知見を整理しておくことにする。

この記録をまとめるに当たり、貴重な文献の閲覧を快諾いただき、また有意義な情報の提供を賜った石原 保、宮武睦夫(愛媛大学)、金磯泰雄(徳島県脇町病害虫防除所)、松本英治(香川県病害虫防除所)、西尾盛勝(松山農業改良普及所)、岡田忠虎(四国農業試験場)、杉原勇三(元、高知県農業専門技術員)、松岡隆洋(愛媛県農業試験場)の諸氏に衷心からお礼を申し上げる次第である。

江戸時代の記録

いわゆるイネドロオイムシは、イネの害虫として古くから知られていたようで、文政9年(1826)に出版された有名な農書『除蝗録』に「壹分位ニシテ甲ニ光アル羽虫ニテ晝ハ稲株ニ手マリノ如ク集マリ夜ハ散テ稻ノ莖ヲクラヒテ害ヲナス」と書いてある。桑山(1932)は、これをイネドロオイムシのことであると解説し、また矢野宗幹(1943)は、これをネクイハムシであるとし、江崎(1952)は、これらのいずれかであると想定している。しかし、これは四国から記録されたものでない。

そこで四国で著わされた農書『清良記』(寛永6年: 1629~承応3年: 1654)、『阿州北方農業全書』(幕末期)、『耕耘録』(天保5年ころ)、病害虫防除の専門的な農書『富貴宝蔵記』(享保16年: 1731)などについて調べたが、本種を想定できる害虫の記録は見当たらない。

明治・大正時代の記録

本種が、四国に分布していることを最初に記録したのは、松村(1907)の『日本千虫図解, 第4』であるが、四国の何処で、誰が採集したのか明らかにされていない。

また本種を記載したKUWAYAMA(1931)の論文には調査標本の記録がなく、さらにその後の同氏の論文『稲泥負虫に関する研究』(1932)にも、四国からの標本は調査していないことが断っており、四国からの記録が不明のまま現在に至っている。

昭和9年(1934~)ごろから北海道大学昆虫学教室に在籍し、研究室の事情に詳しい杉原勇三氏(高

知市横浜に在住)によると“昆虫学教室の四国産標本は、とくに愛媛県から送られてきた標本が多いことに気付いていたので、多分愛媛県内の何処かであろう”とご教示をいただいた。『日本千虫図解』が出版された頃、著者の松村氏と関わりが深い愛媛県内の昆虫研究者としては、ヤノハムグリバエの研究で知られる矢野延能氏(1859~1928)と、『趣味の昆虫界』の著者で知られる荒川重理氏(1884~1976)の2人があげられる。宮武(1985)によると、そのうち、荒川氏は『日本千虫図解』が出版された後に愛媛県に赴任しているが、矢野氏は『日本千虫図解』が出版される前に愛媛県農事試験場東予分場に赴任している。したがって、時期的には矢野氏によって採集された標本から記録された可能性が高いと思われるが、北海道大学の標本を確認していないので、それを特定するにいたっていない。

一方、桑山(1932)は、四国各県の農事試験場に、イネドロオイムシの発生状況を照会して得た回答を『稲泥負虫に関する研究、第2報』に、次のとおり記述している。「愛媛、高知両県ニハ未ダ本種ノ発生ヲ認めズ、香川県ニアリテハ稀ニ発生スルコトガアルモ、従来之ニヨル被害ヲ認メタルコトナント云ヒ、徳島県ニアリテハ従来局部的ニ発生ヲ見ルコトアリ、特ニ大正十二年頃ヨリ勝浦郡ノ一部ニ稍多ク発生セルモ、ソノ被害程度極メテ輕微ニシテ——」。すなわち当時は、高知県、愛媛県に発生がなく、香川県、徳島県の水田に局部的に発生していたが、実害上の問題はなかったようである。

昭和以降の記録

昭和4年に農林省農務局は、全国の農作物に発生する病害虫の種名、方言、被害規模や防除法について『病害虫分布調査、第1、2編』にとりまとめたが、この中には本種が四国で発生したと言う記述はない。

その後、徳島県の山間部の水田には時々発生していたようで、昭和15年(1940)の『徳島県農会報』(No. 786)に「寒冷田に多い泥負虫の防除」という記事のあることが『昆虫関係日本文献目録』(平野, 1959)に掲載されている。またその会報を見る機会がないが、金磯泰雄氏(徳島県脇町病害虫防除所)によれば、近年でも管内の山地がかった水田で、本種の発生が散見されるという。

昭和59年(1984)、香川県病害虫防除所は、小豆島の池田町蛙子(カエルコ)の水田で局部的に発生している成虫を確認している(昭和59年度、水稲病害虫防除協議会資料、7月23日)、発生地は標高約450mにある周囲から隔離された水田であるという。

一方、高知県では嶺北農業改良普及所大豊支所が大豊町一の瀬の水田で、本種の成虫、幼虫、蛹を確認したため、高知県農林技術研究所は『病害虫発生予察特殊報第1号(1990年7月5日)』を出して、新発生害虫としての注意をよびかけた。この発生地は、吉野川水系の上流で、標高約500mにある普通期稲の水田である。

また高知県須崎農業改良普及所津野山支所は、前述の特殊報第1号の発令の後、管内の檜原町上成の水田で成虫の発生を確認した。農家からの聞き取り(1990年7月6日)によれば、3・4年前から毎年発生していたが、とくに実害はなかったようである。この発生地は、四万十川水系の上流で、標高約450mの普通期稲の水田である。

愛媛県では、西尾盛勝氏(松山農業改良普及所)によれば、同氏が今治農業改良普及所南越支所に在勤当時(1953年頃)、管内の竜岡(玉川町)の苗代に発生していたのを、農業専門技術員に同定を依頼し、本種であったことを確認しているという。

おわりに

前述したように、四国のイネドロオイムシの発生規模は、極めて小さく、害虫としての位置づけも低いことから、記録として残っていないことは残念なことである。

四国におけるイネドロオイムシの分布の記録は、1907年まで時代を逆上ることができるが、その後の発生は記録がなく、大正末期になって香川県、徳島県の一部の水田に発生したが、被害は軽微であった。さらに約60年間は発生の記録がなく経過し、近年になって香川県の小豆島、高知県の山間地の水田に発生した。その発生環境は、標高約 400～500 mの山間地のごく限られた水田であって、にわかには害虫化する可能性はないと考えられる。しかし、今回発生した要因が、寒地性昆虫の遺跡的な分布レベルに留まるものか、また近年の薬剤抵抗性個体群の侵入によるものか、さらに稲の栽培型の変化によるものなのか、生理的にも生態的にも不明な点が多いため、今後の発生経緯には十分に留意する必要がある。

引用文献

- 江崎悌三（1952）：日本昆虫学史話（江戸時代編）．新昆虫，5（12）：34－37．
平野伊一（1959）：昆虫関係日本文献目録（195）．大阪植物防疫，7（3/4）：135．
石原 保（1988）：昆虫分類学と自然保護．日本の生物，2（8）：5-9．
KUWAYAMA, S.（1931）：*Lema oryzae* sp. nov. Ins. Mats., 5（3）：155．
桑山 覚（1932）：稲泥負虫に関する研究．第一報，稲泥負虫の外部形態並びに生態；第二報 稲泥負虫の分布．北海道農事試験場報告，29:23-33, pl. LVIII；74-96, pl. 6．
松村松年（1907）：日本千虫図解，第4，警醒社，22-23．
宮武睦夫（1985）：荒川重理．愛媛県百科大事典，上巻，愛媛新聞社，28．
宮武睦夫（1985）：矢野延能．愛媛県百科大事典，下巻，愛媛新聞社：595-596．
農林省農務局（1939）：病菌害虫分布調査，第2編．431 pp．
矢野宗幹（1943）：応用昆虫学史（日本農学発達史），農業図書刊行会：343-344．

なお農書類は、日本農書全集．10，15，30（農山漁村文化協会）を、発生情報は、香川県病害虫防除所（1984）昭和59年度水稲病害虫防除協議会資料（7月23日），高知県農林技術研究所（1989），平成2年度病害虫発生予察特殊情報第1号（7月5日）を参考にした。